紅の盗賊姫レイア
Deep red thief Leia
立ち読み版
小説 筑摩十幸
挿絵 助三郎

第一章　闇夜に咲く紅桜　008
第二章　待ち受ける淫罠　066
第三章　異境の隷姫　127
第四章　白昼の牝犬淫戯　185
第五章　覚醒・解剖台の奴隷姫　211

登場人物紹介

Characters

レイア・リオーネ

普段はメイド。だがその正体は、かつてのアルラン国王女にして“レッドチェリー”の異名をとる仮面の義賊少女。

マリー

レッドチェリーの部下であるエルフの美女。クールな性格で、魔法を使って怪盗チームを支える。

シャンティ

一見純朴な田舎娘に見えるが、容姿に似合わぬすさまじい怪力でレッドチェリーを助けるドワーフ少女。

ブルゴック

現在、アルラン国を治めている将軍。権力を私物化し、重税や賄賂で国民を苦しめている。

ジェフティ

かつてのアルラン王の家臣。王女レイアを保護し、王国の復活に協力している。

エリザベート・バトン

ルハサン連邦の監察官を称する妖しい美女。ブルゴックに取り入り、レッドチェリーを狙う。

「いいぞ、抗え、叫べぇ！　うらあぁぁっ！」
魂が張り裂けそうな絶叫を無視して、残酷な肉太刀が処女孔に撃ち込まれる！
ズブズブズブゥ〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！
「うあああぁぁぁ〜〜〜〜っ！」
ブチンッと身体の奥で何かが裂け、一生に一度の激痛に、エルフ少女は肩胛骨をキュウッと寄せて背筋を仰け反らせる。
（こ、こんな男なんかにぃっ！）
荒々しい陵辱に処女膜は無残にも引き裂かれて、紅い鮮血が敗北の証のように石化した太腿を伝い降りていく。憎くて憎くて仕方ない男に処女を奪われるなど、舌を噛み切りたくなるほど最悪の状況だった。
「おおおっ、乳だけではなく、肉壺もなかなか具合がいいではないか。クックックッ。どうだエルフよ、憎い人間の男に処女を奪われた気分は」
少しずつ前後にスライドしながら剛棒が膣内に押し込まれてくる。
「う、ううあぁ……く、口惜しいっ！　貴様は……許さない……絶対に、殺すっ……ンあぁぁっ！」
レイアとの約束も吹き飛んで、マリーは憎悪に満ちた緑眼で睨む。
「あの村のエルフ共も同じようなことを言っていたが、皆儂のチ■ポに屈服して奴隷娼婦として売られていったぞ。ククク」

嘲笑とともにグンッと一際深い一撃がぶち込まれ、亀頭が柔襞を押し広げて子宮の底にドスンと食い込む。

「ンあああああぁぁンっ！」

子宮から放たれた快美の稲妻が脊椎を駆け上がり、脳幹を直撃する。憎しみも屈辱も破瓜の痛みも、すべて消し飛ぶほどの凄まじい快感にマリーは瞳を見開いて仰け反った。

「おや、もう牝のヨガリ声が出ているようだが？」

「そ、そんな……あうっ……ことは……あむっ……な、ないぃ……はあぁ、動くなぁ……ああむっ！」

お腹の中を満たす巨大な質量に圧倒され、それを呑み込んでしまった自分自身に驚かされる。しかも当初の痛みがどんどん小さくなり、血肉をとろけさせる甘美な熱さがジワジワと拡がってくるのが恐ろしい。これも淫蟲のせいなのだろうか。

「ウヒヒッ。将軍様のほうもいい感じに盛り上がっておられますな。ではこちらも……」

精気を回復させたゾルビオが、シャンティの背後に回り込む。ロリコン商人の勃起がツルツルのワレメに押し当てられた。真珠はなくとも将軍に負けず劣らずの巨根である。

「あひゃあぁんっ！　い、いやなノダ……ああぁ……アひょコに入れられるの……いひゃなノダァッ！」

「もう痛くないでちゅよ。おじさんのチ■ポは、とっても優しいからねぇ」

「あああ……れも、いひゃなモノはいやなノダぁ」

触手に処女を引き裂かれた記憶が蘇るのか、今にも泣きそうな涙目になるシャンティ。しかしそんないたいけな表情も、男の変態性欲を刺激するばかりだった。

「その顔たまんないでちゅよぉ、そぉらあぁ！」

ズブズブッ、ズブゥゥ〜〜〜〜ッ！

「ンあああぁぁ〜〜〜〜〜〜〜っ」

有無を言わさず剛直をねじ込まれ、シャンティは栗毛を打ち振って悲鳴を上げた。まだ処女を失って間もない膣穴には、大きすぎる相手だ。

「はああ、この窮屈な感じ、たまらないでちゅねえ。ハアハア……やっぱり小さいドワーフマ[illegible]コはよく締まるぅ」

ゾルビオは会心の笑みを浮かべ、未成熟故の狭窄感を堪能している。

「あ、あぁぁ……いやいひゃあ、あぁぁっ……なんか……んんっ……へ、変なノらぁ……ああぁっ」

「クックックッ。気持ちいいんでしょぉ？　お腹の奥までビンビン感じちゃうんでしょぉ？」

「はあぁ、ああん……し、知らにゃい……わからないノダぁ……はあ、あぁぁんんっ」

淫蟲のせいなのか、シャンティもそれほど痛がらず、むしろ混乱している様子。肉体の急激な熟成に、精神がついていけないのだ。

「おやおやそんなにぐずって。お口が寂しんでちゅかぁ」

「ンあぁっ！　あああっ！　らメなノダ……あああ……これ、またぁ……おかしくなっちゃうノダぁ……あむぅううぅんっ」

精巧にペニスに似せられた張り型が、淫蟲の開口部からシャンティの唇に挿入される。張り型は驚くほどの深さに達し、おそらく食道付近まで届いているハズだ。

「ああ、やめろ、犯すなら私をっ！」

見るに堪えかねてマリーが叫ぶのだが、男たちはニヤニヤ嗤っているばかり。

「無駄だ。あの男、お前のように大人びた女にはまったく興味がないのだ」

「く……っ」

「淫蟲のおかげでお前もほとんど痛みなく、初体験でヨガリ狂えるのだ。少しは感謝して欲しいものだな。ほれほれ」

剣の腕はイマイチでも、女を責めることに関しては海千山千の強者であった。

「あ、ああっ……やめろ……貴様には必ず……あうう……復讐してやるからな……ああぁっ……いますぐ、私から出ていけぇっ……くあぁンっ！」

浅く深く抽送を繰り返したかと思うと、唐突に最奥をズブリと串刺しにする。もちろんその間には、弱点となった乳房に五指を食い込ませ、根元から先へ向かって搾るように締め上げるのだ。

「ンあぁっ……あぁぁンっ……やめ……はぁう……ああっ……やめろ……はくぅんっ！」

上下の快楽を共鳴させる老獪な淫技に、乙女であるマリーが抵抗できるハズもなく、精

神の壁に亀裂が走り始める。
「牝牛が発情し始めたな。どんどんいやらしい汁が溢れてくるわい」
早くもねっとり絡みついてくる蜜襞の感触にニンマリと嗤いながら、ブルゴックはリズミカルに腰を振った。
ヂュプッ……ヂュプッ……クチュンッ！
「黙れぇ……発情なんて……してないぃ……あっ、あぁぁっ、はぁあああっ！」
逞しい亀頭に拡張された柔襞を真珠粒にゴリゴリ引っ掻かれるたび、網膜に快楽の火花が散って視界が紅いベールに包まれていく。
（お腹も……胸も……熱い……壊れてしまう）
ドスンドスンと突き上げられ、乳房が残像を引いて激しく上下に揺さぶられる。肉体が燃え上がるにつれて、乳肉の中にドロドロした淫らのエキスのようなモノが溜まっていくようだ。
「グフフ。また一回り乳が膨らんできたようだな。この乳はすっかり蟲が気に入ったようだぞ」
張り詰めてますます敏感になる乳肌を指先でギリギリと引っ掻き、淫蟲ごと乳頭をグニグニと揉み潰す。
「ひう、ううっ……あぁぁ……胸には……はあはぁぁ……さ、触るなぁ……っ！」
（うあぁ……胸が……胸が熱いぃ……何かが……こみ上げて……弾けてしまうっ）

過激な吸引と媚毒によって、蟲の体内で乳首は限界を超えて痛いほど勃起させられていた。

感度も数倍に高められ、チュパチュパと吸引されるたび乳果から放たれる快楽の紫電が、心臓を貫いて子宮に突き刺さり、媚肉をバチバチと甘電させた。

「おお、乳を責めるとマ■コも締まるな。ほれほれ、牝牛エルフよ、もっと儂のチ■ポを締めつけろ。形も大きさもしっかり覚えるのだっ」

ドスッドスッと肉棒を撃ち込みながら、乳頭に被さった淫蟲をグイッと根元に向かって引っ張る。すると蟲の後部がズルリと剥け返り、真っ赤なグミ色に勃起したニップルが頭を露出させた。

久々に空気に触れた乳首先端から電撃のような痺れが伝わってきて、マリーの乳腺の中を駆け巡る！

「ひぃあああぁ……あはあぁぁ～～～～んんっ」

思わず色っぽい声が漏れてしまい、マリーは慌てて唇を噛み締めた。だがそれを聞き逃すほどブルゴックは甘くない。

「こんなに乳首を大きくおっ勃ておって、儂にこうされるのが好きか。ホレホレ」

女がいやがることをするのが大好きなサディスト将軍は、そこを弱点と見極めて二匹の淫蟲ごと乳首をガッシリと握り込み、シュッシュッと激しく扱き始める。

「あ、ああっ！　ンああ……やめ……そんなに……こ、こするな……ああぁ……な……な

にかくるぅ……む、胸の奥からぁ……はああぁあっ！」
灼け串を双乳に突き通されたような乳悦に、首枷が軋まんばかりに胸が反る。
全身を駆け巡った沸騰血流が、乳頭に集まって淫らな熱量を蓄積させていく。苦しげにパンパンに張り詰めた乳脂肪で、乳房が今にも完熟の果実のように弾けてしまいそうだった。
「フッフフ。もうイキそうだな。ゾルビオよ、同時にイかせるぞ」
「ははっ。お任せを！」
二人の悪党が息を合わせてラストスパートに突入し、尻肉を打つ音が響き出す。
パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！
「ほうら、ドワーフちゃん。オマ■コもお口も気持ちイイでちゅねぇ？　ハアハア、今度は下のお口におじさんのミルクを飲ませてあげまちゅからねぇ」
「ンぶぅっ……しょんなにしちゃ……らめなノダぁ……うぐ、むぐっ……お口もアソコもぉ……ミリュクのませないれ……んぐんぐっ……もう変になっひゃうノダぁ……んむぐぅ、ぷはあぁっ……らめぇ……わらひ、もうげんかいぃ……ああぁ～～～んっ！」
イラマ張り型と肉棒の同時責めに、シャンティは切羽詰まった喘ぎを繰り返す。もう瞳は焦点を失って、淫靡な責め具に舌を絡めてしまう。幼げな腰もゾルビオの打ち込みにぴったり息を合わせてベリーダンスを踊っていた。
「ハアハアッ！　いきまちゅよぉ！　下のお口にいっぱい飲ませてあげまちゅよぉっ！」

イラマ張り型を根元まで呑み込ませ、同時にズブリと最奥まで膣肉を抉った。
ドバドバドバァッ！　ドクドクドクンッ！
「あおぉおおぉっ！　ンおおおぉ～～～～～っ！　イグゥ！　シャンティ、イっひゃうゥ～～～っ！」
汚辱の射精を受け止めさせられ、シャンティはくぐもった悲鳴と同時に、首をガクンと後ろに反らせる。長大な淫具を呑み込まされた喉がピクピクと痙攣し、そこでも快楽を感じていることを物語っていた。
「んあぁっ……あああぁ、シャンティ……ッ……くぅあああぁ……わ、私も……もう……はぁあああぁっ！」
腰骨が前に突き出され、弧を描いて反り返る胸の上で双乳が跳ね躍る。破裂寸前の息苦しさから解放されるには、絶頂するしかないのだと牝の本能が訴えている。
「さあ、お前もイケ。淫乱な牝牛エルフめっ！　種付けしてやるわっ！　ウオォォォッ！」
ジュブッ！　ズブブッ！　ジュブッ！　ズブズブズブゥゥッ！
これでもかと子宮口に連撃を叩き込み、勃起乳頭をギュウッと搾り上げる。填まり込んだ亀頭がピクピクッと痙攣し、発射態勢をとる。
「や、やめろ……あおぉ……だ、出すなぁ……っ！　あぁぁぁ――――――ッ！」
蜜肉の快美と乳首の魔悦とが心臓の辺りでぶつかり合い、ドロドロに混ざり合って爆発し、マリーの意識を天井より高く打ち上げる。肉体はもう制御を離れ、泡立つほどの濃厚

愛液を溢れさせながら、憎い男のペニスをキュウキュウと締め上げてしまう。
「ウォォッ！　儂の子種をくらえぇっ！」
ドピュッ！　ドピュッ！　ドビュルルルゥッ！
獣のように吠えた将軍が、エルフ少女の膣内に熱精を注ぎ込む！　膣内いっぱいに溢れたあと、子宮口にドバアッとぶつかった。
「アヒィィィッッ！　く、くるぅっ！　ンあぁぁっ！　熱いのが……胸からぁ……はあぁぁ……で、出るぅっ！　出ちゃうぅ～～～～～っ！」
淫蟲に責め続けられる双乳の中をマグマのような灼熱感が乳腺を拡張しながら出口を求めて、猛烈な勢いで駆け上がっていく。
「うあああ～～～～～～ッ！　も、もう……だめぇぇ～～～～～～っ！」
熱波の波頭が勃起乳首に達した瞬間――――。
ブッシャアアアアアアアアアッ！
生まれて初めての母乳が幾筋も乳頭から迸る。乳管を熱い母乳が通過するたび、この世のモノとも思えない快感が湧き起こり、マリーの理性を粉々に打ち砕く。
「フハハハ。母乳を噴きおったわ。ますます儂の好みになってきたなっ」
「あ、あぁぁ……こ、こんなぁ……ああう」
妊娠もしていないの母乳を噴くという異常事態だが、それを考える余裕すらマリーにはなかった。

（な、なにを……する気なの……？）
当然普通の薬などとは思えない。レイアが不安に怯えていると
「あれはクロハゼの毒汁に利尿剤を混ぜたものだ。マゾの隊長にはたまらないだろう」
マリーが耳元で恐ろしいことを囁く。
（いやぁっ！　そんなもの塗らないでぇっ！）
「ヒッ！　ンぐっ……んぐぐっ……ふぐぅんっ！」
イヤイヤと首を小刻みに振るのだが、それ以上は身体が動いてくれない。
「わかりましたっ」
「お姉ちゃんのために頑張るよ！」
二人の少女は使命感に瞳を輝かせ、毒汁のたっぷりついた筆をクリペニスに這わせ始めた。
「アヒッ……ふっ……くっ……ふあぁぁぁ……むっ！」
柔らかな獣毛が、幹に沿って下から上へ、上から下へと舐めるように這い回る。濡れた冷たい感触は、すぐさま焼けつく灼熱感へと変わり、さらに猛烈な痒みへと変化した。
「んんんっ！　ふぅはっ……はぁぁっ……ンぅううっ！」
（痒いっ……痒いぃ～～～っ！）
それでなくとも敏感なクリトリスに、まるで数千の淫蟲が這い回るようなむず痒さが襲いかかる。気も狂わんばかりの掻痒感でレイアは片足四つん這いの身体を痙攣させた。

「レイアお姉ちゃん苦しそう……」
「だ、大丈夫なのかな？」
激しい反応に驚いて、少女たちは筆を止める。
「大丈夫だ。薬が少し染みてるだけで、レイアは悦んでいるんだ」
「そうそう、その証拠にレイアさんからオチ■チ■を擦りつけてきているノダ」
シャンティの言葉通り、痒みに我を忘れたレイアは、少女たちの筆に淫棒を押しつけていた。痒みを癒やすにはわずかな刺激でも欲しい。それがさらなる地獄を招くとわかっていてもやめられなかった。漏れでる声も次第に甘く濡れて、強張っていた表情にも時折悦楽の恍惚が浮かんでしまう。
「そっか、悦んでるのかぁ」
「ああ、よかった」
「だから先っぽのほうにもたっぷり塗るんだ」
そんなレイアの反応と、マリーたちの甘言に簡単に言いくるめられてしまった少女たちは、献身的な丁寧さで悪魔の媚毒を何度も何度も塗り重ねてくるのだった。
「ふうっ……ふぅっ……はあぅ……んぐぅぅ……っ」
ピチャ……ピチャ……コチョコチョ……ヌルッ……ヌリュウッ！
濡れた筆先がカリのくびれや鈴口のワレメを集中的に舐め回すたび、海綿体に媚毒成分が染み込んで、発狂レベルの痒みを引き起こす。

そしてそれに加えて利尿効果までもが発揮され、膀胱がカアッと燃え上がり尿道がヒリヒリと疼き出し、レイアを出口のない淫獄へと叩き落とす。
（痒いっ……痒いですわぁっ！　そ、それに……そんなにされたら……オシッコが……漏れちゃう……あぁ……もうやめて……頭が変になっちゃう～～～～っ！）
強力な利尿剤の猛攻を受けて尿意の嵐が膀胱いっぱいに満ち溢れて暴れ回り、今にも爆発してしまいそう。
（だめぇ……ここで漏らすなんて……死んでも許されないわぁぁっ）
全身の力を尿道口に集中させ、尿意の決壊を防ごうとするレイア。噛み締めるボールギャッグが、今にも砕けそうなほどギリギリと軋み、持ち上げた脚の内股が強張り、ハイヒールのつま先がキュンッと反り返る。必死のあまり噴き出す汗が、滝のように背中を流れ落ちていった。
「頑張るレイアさんって可愛いノダ。もっといじめたくなっちゃうノダ」
ヴゥィィィィン！　ヴゥィィィィィン！　ヴゥィィィィィン！　ヴゥィィィィィン！
アヌスとヴァギナを犯す淫具が、コレまでで最大の強さで振動を再開させる。
「ヒッ！　はひゃあっ……いまは、らめ……らめぇ……ンはあぁぁぁ～～～～ンっ！」
身体の内側を揺さぶるバイブレーションは、尿意でパンパンに膨れ上がった膀胱にダイレクトに響いてレイアを錯乱させる。
「もっと気持ちよくしてやろう」

マリーに操られたレイアの腰が下がってクリペニスの先端が墓石に触れてしまった。

（――――――ッ！）

その瞬間、七色に輝く快美の稲妻に撃たれ、レイアの意識は白光に埋め尽くされる。

冷たく硬い石肌は焼けるように熱くなった肉勃起に心地よく、さらにざらつく感触は掻痒感を一瞬でも忘れさせてくれたのだ。

（ああ……こ、これぇ……）

痒み地獄の底で喘いでいた王女にとって、それはまさに天上から伸ばされた救いの糸に感じられた。

「ハアッ……ハアッ……ン……っく……ふぅあぁ……ああぁむっ！」

（いやあ、こんなことさせないでぇっ！）

両親の墓でオナニーするなど神をも畏れぬ変態行為だ。罪悪感で心は凍りつく一方で、クリペニスは新たな快感に勢いよくそそり立つ。

いけないと思いつつも、いやもう逡巡する余裕もなく、レイアは操られるままに痒みに爛れた淫肉棒を墓石に擦りつけ始めた。

「わあっ、お姉ちゃん、王様のお墓にオチ■チ■擦りつけてるよぉ」

「そんなことしちゃいけないんだぁ。ママに言いつけちゃお」

レイアの痴態に驚きつつも、女の子たちは筆を這わせ続ける。エロチシズムを感じ取った幼い性が、少女特有の悪戯心や無邪気さと相まって、サディスティックな情感を覚醒さ

せるのだ。
裏筋のぷっくり膨らんだ尿道に沿って、ゆっくりと筆先が這い上がる。
なめらかな亀頭の曲線をなぞり上げたあと、鈴口の周りをクルクルと円を描いて舞い踊る。
レイアの中で痒みと尿意と射精の欲求とがドロドロに融けあって、灼熱のコールタールのように膀胱に蓄積されていく。もはや決壊は時間の問題だ。
(こんなこと許されないっ……ごめんなさい、お母様……お父様ぁっ!)
塗り重ねられる媚毒に痒みが増幅され、それを癒やそうと背徳的すぎる被虐自慰をやめられなくなっていく。もはや自分が操られているのかすらわからなくなってきた。
「遠慮することはないぞ、隊長。そのまま漏らすんだ。お墓の上にな。フフフ。素晴らしい墓参りじゃないか」
(やめて……ゆるして……だめぇ……いけないのに……だめなのに……どうして……これ……やめられないのぉ……っ!?)
シュッ……シュッ……ズズッ……ズリズリィッ!
リズミカルな圧迫と研磨が繰り返されるたび、疑似男根の中を凄まじい快感が走り抜け、植えつけられた射精本能を直撃する。つま先が熱くなってジンジン疼き出し、何度も開いたり閉じたりを繰り返した。
攪拌される膣孔からも白濁した本気汁が溢れ出し、鎖に括り出された乳房もタプンタプ

ンと揺れ弾む。
「見てよユリちゃん。またオチ■チ■おおきくなっちゃった」
「先っぽから変なお汁がいっぱい出てきてるね。やっぱりレイアお姉ちゃんはロシュツショーのビョーキのヘンタイさんなんだよ」
（ああ……ン……見ないで……言わないで……ああン）
そこに浴びせられる無垢な罵声と視線が何よりも強力な麻薬となって、王女の知性や矜持を腐敗させ、レイアを一匹の変態牝へと造りかえていく。
「ンぐっ……むふっ……いひゃ……ふぐっ……らめ……あふんっ！　ひぃ……いぃ……あふぅぅんっ！」
もう何も考えられなくなって発情期の獣のようにレイアは腰を振り出した。あまりの激しさに墓石がギシギシと揺れるほど。紅い瞳は情欲にとろけて目尻を下げ、緩んだ口もからヨダレが垂れ出す。そこに一国の王女の威厳など微塵も見られない。
「オチ■チ■をお墓に擦りつけて、その恥ずかしい姿を見られて気持ちいいノダ。もう立派なマゾの露出狂なノダ」
「ふふフ、君たち。もっと深く、オチ■チ■の中まで薬を塗ってくれ。そして悪い膿を出してやるんだ」
「わかりました」
「いくよお姉ちゃん、エイ、エイッ！」

二本の筆が、我慢汁をはき続ける鈴口を集中的に責め立てた。
「ハヒィ……ヒィウウ〜〜〜〜〜〜〜ッ!!」
尿道にまで侵入した穂先から大量の媚毒が送り込まれ、猛烈な痒さと尿意がクリペニスの中心を串刺しにする。バチバチと脳内と膀胱内で火花が散り――――――――。
「おひっこっ！　おひっこレるぅっ！　アオォォォォ〜〜〜〜〜〜〜ッッ！」
ブッシャアァァァッ！　ジョロロロロォォォォ〜〜〜〜〜〜〜ッッ！
獣のような咆哮と同時に、かつてないほど勃起した淫核ペニスの先端から、黄金の痴水が滝のような勢いで噴き出し、二つの墓標に降り注いだ。
「きゃあ、本当にオシッコしちゃった！」
「うわああ、王様のお墓がビチョビチョだよぉっ！」
（ゆるして……お父様ぁぁ……お母様ぁぁぁぁっ！　ゆるしてぇっ！）
開ききった瞳から大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちる。だが一度崩れた堰はどうやっても止めることはできず、恥知らずな淫棒は汚辱の聖水をぶちまけ続けた。
「アハハハ！　レイアさんったら最低なノダ！　人間以下の牝犬なノダァ！」
「もっともっと堕ちるんだ。二度と戻れなくなるほどになっ！」
ヴィイイイ〜〜〜〜ンンッ！　ヴィイイイ〜〜〜〜ンンッ！　ヴィイイイ〜〜〜〜ンンッ！　ヴィイイイ〜〜〜〜ンンッ！
二穴バイブが強烈に振動しながら、肛門を押し広げ、子宮をグイッと持ち上げる。淫具

から突き出た瘤が粘膜を溶かし、擦れ合う薄膜に被虐の炎が燃え上がる。
「アヒィィ――――――――――ッ！」
ズーンと脳天まで響く衝撃が魂を打ち砕き、最後のタガを解き放つ。
クリペニスがそれまでの倍ほども一気に肥大化し、墓標を押し倒さんばかりに押し当てられる。それがかつてない背徳の愉悦を呼び起こし、トドメのトリガーが引かれてしまう。
「あああぉぉぉぉっ！　イグッ！　れるっ！　おひんぽイッグゥ～～～～～～～～～ッ！」
ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュルルルルルゥゥゥ～～～～～～～～ッ！
放尿が途切れた直後、今度は黄金水と混じり合った濃厚な白濁液が鉄砲水の勢いで噴出し、墓標にべちゃあっと命中した。白濁は汚辱の糸を引いて垂れ流れ、彫られた父と母の名に流れ込んで王家の誇りを穢していく。
「アハハハ、オシッコと射精を同時にするなんてすごいノダ！」
（いやああぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～っ！）
「ヒッ！　ヒィンッ！　アヒィィ～～～～ッッ！」
悲しみも絶望も羞恥も、すべてが快感にすり替わり、レイアの精神をズタズタに引き裂く。絶頂感がいつまでも持続し、泣こうが喚こうが、浅ましい放尿射精は止まらない。
ドプッ！　ドプッ！　ドクドクドクッ！　ビュクビュクビュクッ！
クリペニスがポンプのように拍動し、圧縮された精液を高圧で発射する。熱い塊が尿道を灼きながらくぐり抜けていくのが気持ちよすぎて、それまでの掻痒感もどこかへ吹っ飛

んだ。地獄の底から噴き上がる淫らの炎に包まれて、心も肉も骨までも灰になって燃え尽きてしまいそう。

（見られてるぅ……見ないで……ああぁ……私、最低……最低の変態ですわっ）

そんな煮え滾る焦熱業火の中でもレイアは女の子たちの初な視線が勃起に注がれているのをハッキリ意識していた。そして羞恥を伴う視姦が、快楽を何十、何百倍にも増幅させることも……。

「やだぁっ、お姉ちゃんのオチ■チ■から白いオシッコが出てるぅ」

「ベトベト、ドロドロして、なんだか変な匂いがするよぉ」

遥かに年下の少女たちから浴びせられる非難すらも、今のレイアにとっては甘美な毒蜜だった。犬のオシッコポーズを維持したまま、何度も放尿射精を繰り返し、ついには墓石を上から下までザーメンまみれに穢しきってしまった。

「お姉ちゃんのオシッコでお墓が真っ白になっちゃった」

「レイアお姉ちゃんがこんなヘンタイだったなんて。みんなにも教えてあげなくちゃ」

女の子たちはキャッキャッとはしゃぎながら、村のほうへ駆けていった。

「はあっ……はあぁっ……もう……らめ……ああぁ……」

最後に一際濃いスペルマをドプッと吐き出し、レイアはその場に倒れ込む。大切な何かを搾り取られてしまったように身体に力が入らず、もう指一本動かせなかった。

「ウフフ。レイアさん、とってもいやらしくて最高だったノダ」

レイアたちが城に着いたときには、太陽が天頂を過ぎて傾き始めた頃だった。
道中では、怪盗少女たちは次々に見知らぬ男たちに口淫奉仕させられ、ザーメンを飲まされ、痴声を交互に放ちながら、汗とヨダレとガマン汁と母乳とオシッコと、そして女として取り返しがつかないほどの恥を町中にまき散らした。
「なによ、あれ。いやらしい。変態じゃないの」
「人間として最低よね。あれじゃもう動物以下よ」
顔面は白濁と痴垢と陰毛にまみれ、穢れきったレッドチェリーに同情する者は一人もなく、薄汚い家畜を見るような侮蔑と蔑視の視線を短刀のように突き立てるのだ。
「ハアハア……ううっ……みんな……あぁぁ……」
そんな侮蔑の声や視線にまで、レイアの身体は地獄のようなマゾの炎を燻(くすぶ)らせていた。精液をたっぷりと飲まされたせいで、肉欲はますます荒ぶり、射精を堪える疑似男根はいつ暴発してもおかしくない限界ギリギリの状態だった。
「やっと到着したか、レッドチェリー。男共のザーメンはうまかったか？」
特設された公開裁判所の中央席にブルゴックが尊大にふんぞり返っている。裁判と言ってもそこに仕掛けられた様々な道具は拷問室を連想させた。
「は、はい……とても美味しかった……です……うう」
脂ぎったいやらしい視線に射貫かれてレイアはゾクゾクとうなじを粟立たせた。相手は

両親の仇の憎い男だと頭ではわかっていても、これまで何度も犯され味わわされた絶頂の記憶が倒錯した期待感を煽ってくる。

（ああ……ブルゴック……これからアイツに……みんなの前で……）

あの男に衆人環視の中で辱められることを想像すると、淫蟲に取り憑かれたクリペニスがビクッビクッと戦慄いた。それが期待なのか恐怖なのか、自分でもわからない。

「フフフ。だいぶ素直になったようだな。ところでレッドチェリーよ、お前たちの犯した罪による被害はおよそ三億フルムだ。これだけで十分死罪に値するが、自らの身体で弁済しようというそなたたちの覚悟には、大いに情状酌量の余地がある」

裁判官のように尊大ぶって大袈裟に語るブルゴックだが、少女たちを見つめている眼は淫猥に澱んでいる。

「よって、今後一生死ぬまで毎日十人の客をとる、売春刑と処す！　異論はないな」

クチュッ……グチュルッ……ブゥウウウ～～～～～～～ンッッ！

将軍の言葉と連動して、レイアの亀頭部に寄生した淫蟲の繊毛触手が振動を強め、レイアに承諾を強要する。

「うあああっ……レイアは……よ、悦んで……ば、売春刑をお受けします……はあんっ」

（これ以上されたら……またおかしくなっちゃう……とにかく早く終わらせないと……）

淫蟲の責めに堪えかねて、赤毛の怪盗少女は敗北の言葉を口にする。ほじくられ続ける尿道はパンパンに膨れ上がって、快美を詰め込まれたサラミソーセージのような状態だっ

た。しかしジェフティのためにも絶対に精を放つわけにはいかない。
「では早速ここでセックスショーをしてもらうかな。フフフ、そこに寝るのだ」
「セ、セックスって……い、今から……こ……ここで……」
王女である自分が人前で性交するなど破廉恥にもほどがある。想像しただけで全身が羞恥の炎に包まれ、心臓が口から飛び出しそうなほど高鳴った。
「そうだ。大勢に見られながらのほうが燃えるだろう？　グフフ、お前のことはすべてわかっておるのだ」
勝ち誇ったように嗤われてもレイアは反論もできない。
「早く本番してみせろ！」「売春婦になるんなら、それくらい当たり前だぜ」
観衆の反応も期待のせいか熱気を帯びて、いまさら引き下がれない空気を醸し出していた。
「うう……わ、わかりましたわ……」
（そうよ、いまさら恥ずかしがっても仕方ありませんわ……好きなだけ見ればいいわ）
長方形の革張りテーブルの上に仰向けにされ、手首は頭上に足首は側面の金具に鎖で固定されてしまう。犯しながら、レイアの顔や異形クリペニスを観客に見せつけるポーズだ。
「すっかり露出の快感に酔ってるみたいね。さあ、おねだりをするのよ」
勃起状態の淫核棒をゆっくり撫で擦り、エリザベートが迫る。
「はあっはあっ……み、皆さん……これからへ、変態フタナリ売春婦、レイアの本番生ハ

メセックスショーを行います……あぁぁん……よくご覧になって……ください……」
犬のように舌をはみ出させてハアハアと喘ぎながら、懇願してしまう盗賊姫。完全勃起状態の疑似陰茎は、期待するように先端から白濁混じりのガマン汁をポタリポタリと滴らせていた。それと同時蜜孔もヒクヒク蠢きながら夥しい果汁を湧かせ、男根の挿入を今や遅しと待ち構えていた。
「おいおい、あんなにおっ立てて、すげえ淫乱女だな」
「オマ■コもグチョグチョだぜ。売春刑にされて嬉しくて仕方ないんだろうよ」
浅ましいレイアの痴態に観衆は呆れ、罵声を浴びせてくる。
「グフフ。いいぞ、お前たち。レッドチェリーを犯せ！」
ブルゴックの指示で十人ほどの男たちがステージに上がってきた。身なりも汚く、髪はボサボサ、一目見て浮浪者だとわかった。
「こんな可愛い娘とヤれるなんて、最高だぜ」
「チ■ポがついてるけど女にゃちがいねえ。ハアハア」
男たちは、飢えたハイエナのような目つきでレイアを見つめ、人目など気にする様子もなく我先にズボンを下ろし始めた。周囲に設置された魔法灯が桃色の光を放って、官能的なムードを盛り上げる。
（ああ……ジェフティさまのためとは言え……みんなの前で犯されるなんて……）
至近距離で男たちに取り囲まれ、視線をよりいっそう強く感じてしまう。少女として神

聖な性行為を見世物にされる屈辱までもが、レイアのマゾヒズムをくすぐってくる。
「へへへッ。それじゃあ俺からいくぜっ！」
ズブズブッズブズブゥゥ〜〜〜ッ！
最初に服を脱ぎ終えた若い男が、レイアの太腿を押し開き、穢れた肉棒を突き入れてきた。前戯も何もない、欲情を排泄するためだけのセックスだ。
「ンあああぁぁ！　入ってくるぅ……だめ、こんなのだめぇっ！」
「ああん？　何をいまさら。犯してくれって言ったのはお前だろ」
「で、でも……こんな大勢の前では……ああぁ……感じちゃうっ！」
衆人環視の中でセックスを強要され、被虐と露出の快感が相乗効果で混ざり合って燃え上がる。昂奮が疑似男根を疼かせ、今にも射精してしまいそう。
「くおおっ、すげえぜ。しゃぶりついて……メチャクチャ気持ちイイぞ！　ウヘヘ、やっぱりチ■ポが欲しかったんじゃねえかよ！」
「あああ……ちが……うぅぅんっ！　欲しくなんかぁ……ああぁんっ！」
（ダメよ、感じちゃ……イってはだめぇっ！）
心は悲しみでいっぱいなのに、散々焦らされた蜜壺は、抵抗するどころか嬉々として、汚れた肉棒をくわえ込んでいく。そんな浅ましい反応を国民に見られていると思うと、爛れるような快美にクンッと喉を反らし、レイアは背徳の魔悦に腰を震わせてしまう。
「オホホッ。いい表情よぉ。じゃあもっと感じさせてあげるわぁ」

ヒクつくクリペニスをエリザベートが王家の秘宝の剣でリズミカルに扱き上げる。すると、拘束台の背後の空間が揺らいで巨大なスクリーンとなり、レイアの裸体が大写しに浮かび上がった。

「おお、すげえ。こいつはよく見えるぜ」「填まってるところまで丸見えだな」

観衆はどよめき、次には欲情の歓声を上げた。犯している男の視点で展開されるセックスショーは、ある意味生で見る以上の迫力を伝えて、まるで自分が犯しているような気分にしてくれるのだ。

「秘宝の力を使えばこんなことも簡単にできるのよぉ。ほうら、今レイアちゃんのセックスが、町中の何千という人に見られているのよ」

きめ細かな肌、そこに噴き出す汗、悩ましく陶酔する美貌、艶やかに喘ぐ唇、太いペニスを撃ち込まれる秘園……そのすべてが暴き出され、手に取るようにわかってしまう。

「ひぃっ！　ま、町中になんて……恥ずかしい……私を見ないでぇ……あぁぁうん」

何千という不特定多数の視姦がセックスの快感を増幅させ、狂おしいまでの射精本能が淫棒の中で荒れ狂う。露出の快感を教え込まれたレイアにとってたまらない刺激だ。

「晒し者だな。おらおら、オマ■コもいい感じだぜ。奥の奥までトロットロだ」

ズンッズンッと膣奥を突き上げられるたび、子宮が快楽に燃え上がり、理性は濃密な淫夢に染まっていく。

（ジェフティさま、助けて……私……変になっちゃうっ）

ジェフティの存在を意識すればするほど、脳内にバチバチと火花が走って、今にもイってしまいそうだった。
「このまま犯しても悦ぶだけで面白くありませんわね。もっともっと苦しんでもらわなければねえ、ウフウフウフ。レイアちゃん、こっちを見なさい。実はあなたがリオーネ王家の生き残り、レイア姫かもしれないという証拠を見つけちゃったのよ」
エリザベートが邪悪な笑みを浮かべてパチンと指を鳴らす。
「レ、レイア……」
(!?)
その声を聞いた瞬間、レイアは骨の髄まで凍りついた。仮面の奥で盛んに瞬きする紅瞳が徐々に輝きを取り戻していく。そして開ききった眼に映っているのは、この世で最も愛しい恋人、ジェフティに違いなかった。
「い、い……いやあああああ〜〜〜〜っ！　ジェフティさま、見ないでぇっ！　私を見てはだめぇっ！」
魂も吹き飛ぶ勢いで絶叫する仮面少女。愛する人の視線が引き金となって、最後の防壁はあっさりと崩壊した。死にも勝る恥ずかしさに全身の血が逆流して肉棒に流れ込み、海綿体細胞の一つ一つが燃え上がる。
ドビュッ！　ドビュッ！　ドバアアアアアアッ！
「ヒィィ――――――――――――――――ッッ！」

淫蟲の触腕の中に、煮え滾る情欲の汚濁を噴き上げてしまうレイア。堪えに堪えたザーメンは、少し黄ばんだ特濃スペルマ。それをジュルジュルと音を立てて淫蟲が飲み干していく。

「ウォオオッ！　吸い込まれそうだっ！　くらえぇっ！」

レイアのエクスタシーに巻き込まれるようにして、犯していた男も膣内にドバドバと生殖液を流し込む。

「あ、ああ……熱いぃ……ンあぁぁ……っ」

「オッホッホッ。これで二回目よぉ。だらしないわね、レイアちゃん」

「はあっ……はあっ……そんな……約束が……」

「二回も射精しておいて、そんなこと言えた立場じゃないでしょ。しかも彼に見られて感じちゃうなんてねぇ」

「うう……」

エリザベートの言う通り、ジェフティの視線にこれまで感じたことがないほどの愉悦を味わってしまったのは確かだった。

「くっ……レイア……なんてことに……」

「ウフフ。せっかくレイアさんのために連れてきてあげたのに見ないなんて、いけないノダ。ちゃんと見るノダ」

マリーとシャンティに引き立てられ、ジェフティは長方形の小型のギロチン台のような

モノの前に立たされる。そして円形にくり抜かれた木枠に、ペニスを固定されて、立ったまま身動きとれなくなった。
「く……ここから降ろせ！」
黒革の拘束具に彫像のような筋肉質の肉体を拘束され、後ろ手に縛られる。レイアや国民の前でペニスを晒される屈辱に、ギリギリと歯がみしている。
「おい、あれはジェフティ男爵じゃないか」
「男爵は王国一の忠臣だぞ……彼が関係しているならあるいは……」
「いや、まさか……もしそれが本当だったら、あの淫売が王女様ってことだぞ……ありえんだろ」
意外な展開に観衆はざわめき、さらに興味を増した視線が仮面の少女に集中した。
「グググ。ジェフティ男爵よ。お主がレッドチェリーと関係があることはわかっておる……まさかとおもうが、この娘はレイア姫なのか？　正直に答えれば去勢刑は中止してやってもいいぞ」
去勢台の上部には鋼刃の代わりに斜めになった紅い光のブレードが不気味に輝いている。
「それは男性機能を終わらせる魔法の刃なのよぉ。その光に触れたら、前立腺と睾丸が破壊されて短小包茎の種なしインポになっちゃうの。ウフウフウフ」
「なっ……くううっ……知らないっ！　知っていても話すものかっ」
レイアをかばおうと、ジェフティは必死で首を横に振る。とは言えさすがの英雄騎士も

去勢される恐怖で青ざめている。
「そうか。姫様でなければ、何をしようと自由だな。おい、お前たち。もっとレッドチェリーを犯すのだ」
「もちろんだぜ」
すぐさま次の男が覆い被さり、白濁に穢された蜜孔に剛棒を荒々しく突き入れた。
「ンあぁぁっ……まって……あううぅん……激し……くぁぅんっ……いやぁ……ン」
一度は奴隷に堕ちる覚悟を決めたレイアであったが、恋人の前で犯されるのはあまりに辛かった。氷のナイフで胸を裂かれ、心臓を抉り出されるような狂おしさだ。だがそのくせ視線に灼かれる蜜肉は、新たな愛液を滲ませて見知らぬ男根を迎え入れてしまう。
「うう、彼女から離れろ。殺すなら私を殺せ！」
激しい怒りに頭髪を逆立たせ、ジェフティが吠えた。
「ゴチャゴチャ言ってないで、ホラホラ、去勢されやすいように、もっとオチ▒ポ大きくするノダァ」
シャンティが固定された男根を頬張り、チュパチュパと吸い立てる。
「うぁぁ……シャンティ……だめだ……そんなことを……しては……くぅあぁぁっ」
改造された舌技はどんな娼婦にも負けないほど絶品で、ジェフティの『牡』が反応しないわけがなかった。不覚にも口内でムクムクと体積を増し、より逞しく勃起してしまう。
「ほら、男爵様。もっとレイアを見るんだ。そのほうが彼女も悦ぶ。フフフ」

さらに背後からエルフ少女のペニスバンドにアナルを貫通され、ジェフティは苦鳴を上げた。ディルドウの先端は前立腺に食い込み、強制的にペニスを勃起状態にさせていく。
「うあああ……マリーまで……うぅぅ……」
歯がみしながら、恐る恐る瞼を開く。そこにあるのはあるときは父のように、またあるときは兄のように接して、大切に育て上げた美しい少女の肢体。
「レ、レイア……くううっ」
丹精込めて育んだ華を無残に踏みにじられるというのに何もできない。絶望的な悔しさにジェフティは唇を裂けるほど噛み締めた。こめかみに浮き上がる血管から今にも血が噴き出しそうだ。
「あっちも盛り上がってきたわね。レイアちゃんは、これをくわえてなさい」
「ううっ!?」
細いロープの端を噛まされ、レイアは戸惑う。そのロープはなんとギロチンの光刃に繋がっているではないか。
「理解できたようね。それを放したら男爵様のオチ■チ■は一巻の終わりってわけよ。次が三回目だからこれくらいの演出は必要よねぇ」
「グフフ。もし最後までガマンできたら、男爵を無罪と認め、釈放してやろう」
「ああ……ひ、卑怯……もの……ンぐうううっ」
必死に歯を食いしばり、ロープを噛み続けるレイア。かなりの重さがあり、少しでも気

を抜けば滑り落ちてしまうだろう。
（絶対、死んでも放すものですかぁっ）
ロープをキリキリと噛み締め、全神経を集中させて官能の荒波に逆らうレイア。こわばりが膣肉を緊縮させ、それが男に強烈な快美を与えた。
「くぅおおっ！　なんて気持ちよさだっ！　も、もう、ガマンできねえっ！　うらぁ！」
どぴゅっどぴゅっ！　どばぁぁぁっ！
十回往復したくらいで、男はあっさり限界に達しレイアの膣内に白濁をぶち込んだ。汚辱の濁流が、膣内にドクンドクンと注ぎ込まれてくる。
「ンぐあああぁぁぁ〜〜〜んっ！　らされてりゅぅ……あくぅううんっ！」
ジェフティが見ている前で特濃の中出しを決められてレイアは美貌を仰け反らせた。灼熱感が子宮にベットリ張りつき、いやらしい温もりを染み込ませてくるのがたまらない。
「んぐぐっ……ううう……ふうっ……むふうぅんっ」
（入ってくるぅ……精液がぁ……あぁ……熱いぃぃ……っ）
それでも全身の力を込めて、アクメを抑え込む。やがて官能の熱波が去ると、浮き上がっていた背中がガクンッと拘束台に落ちた。
「レイア……」
「ううっ……見ないれ……くらさい……あぁ……感じちゃうから……らめぇ……っ」
励まそうとするジェフティだが、その声や視線がレイアを被虐の迷宮へと追い込んでし

まう。
（見られるのが……こんなにスゴイなんて……これが露出の悦び……）
恋人の前で輪姦にかけられ、しかもそれを町中の人に観賞されている。そんな最悪の状況を意識すればするほど、レイアの媚肉は充血してヒクヒクと蠢き、クリペニスも浅ましいガマン汁を溢れ返らせてしまう。そんな自分の身体に刻み込まれたおぞましい性癖を自覚せずにはいられなかった。
「これが奴隷娼婦のオマ■コか……すごすぎるぜっ！　街の娼婦とは段違いだ！」
ジュポンッと陰茎を抜き取った男が離れると、すぐさま次の男が入れ替わる。ぽってり太った中年男だ。
「そんなにすごいのか？」
「ああ。なんかチ■ポにコツコツ当たって……グリグリ食い込んできて、とにかくすげえんだよ」
レイアの名器ぶりに浮浪者たちは驚き、ざわめき、その余波は観衆にも伝播して、場内は異様な雰囲気に包まれていく。
「こいつは気合いを入れないといけねえな」
「ああ、絶対イカせてやるからな」
闘争本能に火をつけられた浮浪者たちが、眼をぎらつかせてレイアに迫っていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
産みたくないっ
やだ…もう
偶数月17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
COMIC UNREAL
発射準備はできましたか?提督♥
奇数月12日発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
Vol.14
ハーレムウェディング
対魔忍アサギ2
奇数月下旬発売
強く美しいヒロインが…
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。